

第3節 吹上遺跡の出土遺構の変遷について

1. 吹上遺跡の遺構変遷について（第16・17図）

吹上遺跡の過去11次に及ぶ発掘調査範囲は、遺跡全体面積の数％に過ぎないものの、台地全面に及んでいることもあって、大まかにではあるが遺構の変遷を確認することが可能となっている。この小節では、吹上遺跡の遺構変遷について纏める。

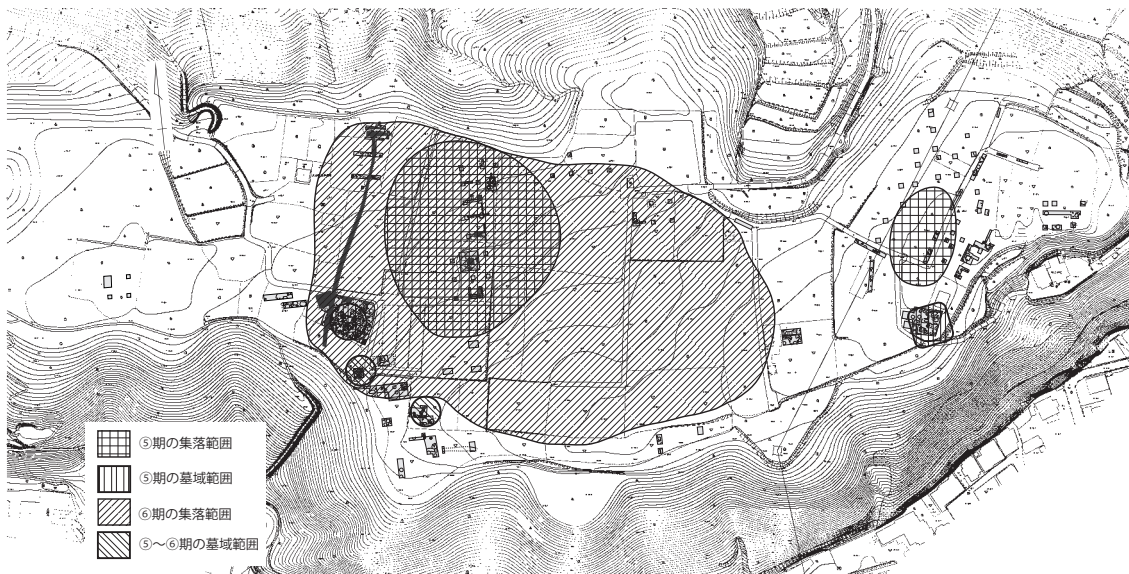
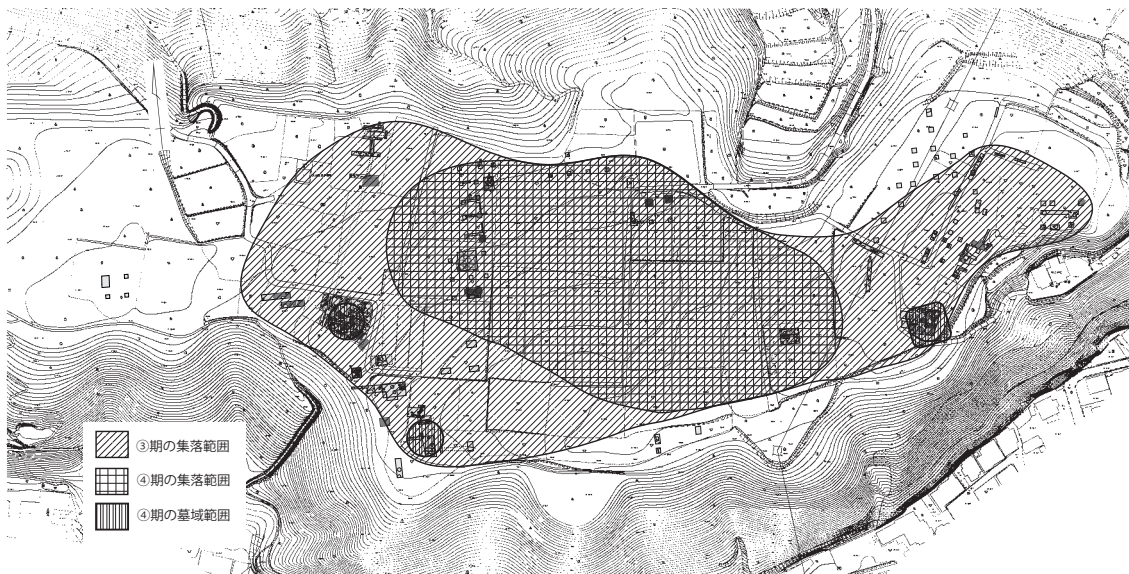
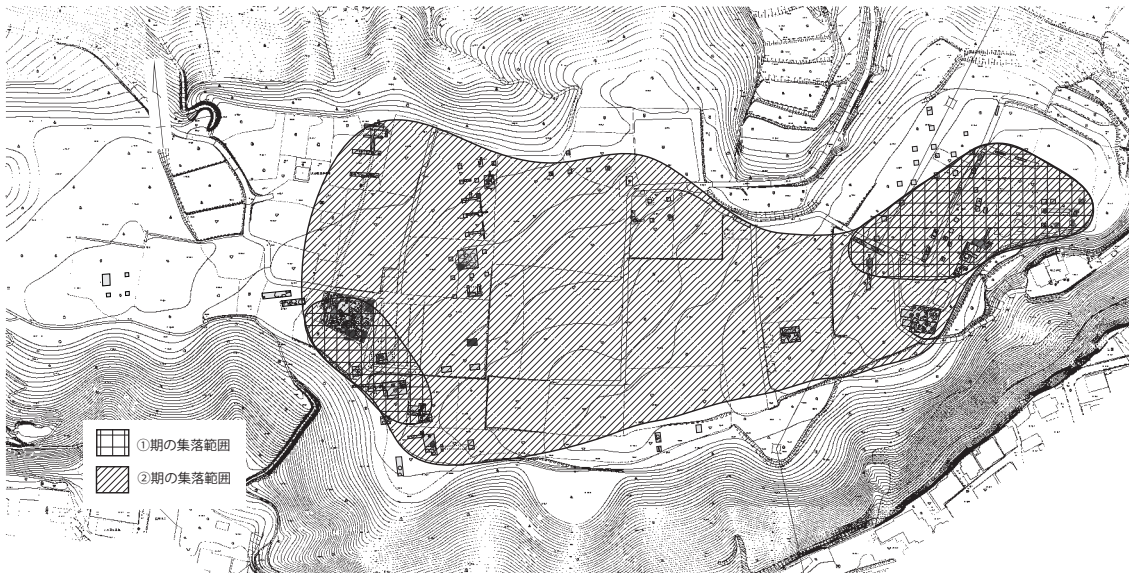
但し、遺構変遷については、完全掘削していない遺構が多く、時期同定が困難な遺構も多々見られる。時期比定には前章で論じた弥生時代時期区分を用いるが、出土遺物によって存続期間を考慮する必要がある場合が多いため、弥生時代①期（前期後半）；前期後半3期～5期、②期（中期初頭）；中期1・2期、③期（中期前半から中頃）；中期3～5期、④期（中期後半）；中期6～7期、⑤期（後期前半）；後期1～2期、⑥期（後期中頃から後半）；後期3～5期、⑦期（古代末）；12世紀前半と大まかに時期を分けて説明するものとする。それぞれの遺構の時期については、基本的に各報告書での時期比定と出土土器の特徴にしたがって整理することから、一つ一つの遺構について細かく触れず、図上で表現することに留める。なお、紙面の都合上、高縮尺率で作図するため、詳細は第1節ないし各報告書を参照頂きたい。

①期は吹上遺跡の利用開始時期で前期後半3期に貯蔵穴^{*7}の出現が見られ、9次調査区A・B地点など台地東西両側に偏って出現したものと考えられる。その後②期にかけて徐々に台地中央部でも貯蔵穴が見られるようになり、次第に集落域が広がって行ったことを示している。この貯蔵穴の③期迄の総数は47基にも及び、実際にはこの数十倍以上所在した可能性が高い。市内ではこの時期の遺構の大半が貯蔵穴であり、北部九州の弥生遺跡と同様に、穀類を含めた食料貯蔵が本格化したことを物語っている。但し、①～②期の竪穴建物⁷は少なく、僅かに9次調査区B地点・10次調査区に確認される程度で、墳墓も6次調査区で小児用甕棺が1基見られるくらいと、集落としてはそれ程大きなものではなかったと思われる。本来、貯蔵穴を管理していた集落が未調査地に広がっていたのか、或いは貯蔵穴専用の区域だったのかは、今回の調査結果からは断定することは出来なかった。

③期には、貯蔵穴は既に廃棄土坑となっていたものと考えられ、ほぼ①②期と同一箇所⁷に遺物の出土がみられる。この時期は遺構の数が若干減少する可能性が高いが、竪穴建物に関しては、2次H区、7・10・11次といった前時代に見られなかった範囲に広がり、本格的に台地全体に集落域が広がったことを物語っている。さて、この頃には2次2区5トレンチ周辺で小児用甕棺墓が見られ、6次・9次B区周辺に本格的な墓域が作られるようになったものと考えられる。なお、木棺墓の所属時期は判然としないが、切り合いや位置関係などから甕棺以前の成人墓と判断している。このように集落域が広がり複数墓域を有するようになるなど、吹上遺跡は続く④期にかけて最盛期を迎えるものと考えられる。なお、墓域の変遷については次小節で詳細に触れる。

④期の集落域は、台地中央部付近の8次調査区から西側に多く見られ、台地中央部付近が中心となったものと予測される。6次調査区にはこの時期に最盛期を迎える特定集団墓があり、この周辺に遺構が見られなくなることから、特別な領域として認識されていたものと理解されよう。また、2次・9次調査区を中心とした墳墓群も継続して営まれるため、これら墳墓を意識して台地中央部及び北側が集落域となり、吹上遺跡の台地の空間構成が明瞭に区分されていたと考えられる。なお、この時期には貯蔵穴群がなくなるが、10次調査区などに掘立柱建物が複数見られ、各調査区でも柱穴の可能性のあるピットが多数見受けられることから、集落に沿って掘立柱建物群が所在したのと考えておきたい。

⑤期になると、6次調査区一帯の特定集団墓の造営が終了し、それまで見られなかった墳墓の近隣（やや離れた）箇所⁷に竪穴建物が作られる。このことは、④期までに形成された明確な空間配置が緩んで行ったものと考えられるが、依然として集落の中心は台地中央部北側一帯となる。この時期の墓域は1・4・9次調査区を中心と



第 16 図 時期別領域変遷図 (1/4000)

した南端一帯に集塊状態に作られ、見た目列状墓を形成している。副葬遺物などの構成からみて、より上位の階層と判断される特定集団墓の造営が終了し、より下位の階層を中心とした墓域が継続されるものと考えられよう。このことは、吹上遺跡の集落の構造のみならず、日田地域の弥生集落の構成を考える上でも重要である。

⑥期になると、集落は⑤期と同様に台地中央部北側を中心とした一帯に継続されるが、なかでも注目されるのが、台地中央部を南北に分断すると予測される条溝の出現である。断面 V 字状を呈し、深さが 1.5m 前後と予測されるこの溝は後期 4 期の竪穴建物を切り込むことから、後期 4～5 期にかけて掘削されたものと考えられ、埋没時期は出土遺物の構成から、終末期の後期 5 期と考えておきたい。さらに、この溝以外にも 1 次調査 I 区において、溝状の遺構の掘り込み（溝かどうかは断定できない）などが見られ、台地内部を分割する行為がこの時期に開始された可能性が高い。条溝はさらに、台地北端においては、台地際に沿って巡る 2 条の溝と T 字状に接合することが確認されており、台地を巡る環濠の存在も想定される。これまで、吹上遺跡の所在する吹上台地はその標高差が 50m 弱あり、自然要害としての機能が想定されるため、環濠の存在は考慮されてこなかった。しかし、台地南側の比高差に比べて、北側は谷に向かって緩やかな斜面を形成しているため、地形に応じて環濠などを巡らしていた可能性が考えられる。さらに、続く古墳時代初頭においては、張り出しを持つ小型円形環濠から方形環濠へと変遷し、条溝で空間分節した台地に、特別な施設と考えられる方形環溝を有する建物を築造する小迫辻原遺跡が、北側の谷を挟んだ台地上に所在しており、時期的な関連性を想起させるには充分であろう。後期後半の⑥期には、古墳時代の小迫辻原遺跡と同様の機能を有する特別な集落が、既に吹上遺跡に所在していた可能性が考えられるが、未調査部分が多く詳細は今後の調査の進展に期待したい。また、この時期には有力な副葬遺物を伴う墳墓も確認されず、集落に付随する特定集団墓が確認されない点も注目される。単に未発見なのか或いは日田盆地における中心的機能は他遺跡に移っていたのか、今後の興味は尽きないところである。

その後、古墳期には 6 世紀後半を中心とした横穴墓域が台地南側の崖面に造営されることになるが、台地上に集落はほとんど見られない。次に台地上に人々の痕跡が見られるのは古代末 12 世紀前半の経塚の造営に限られる。この経塚造営は吹上観音を中心とした聖域としての整備であったものと考えられ、近世に至るまでの間台地上が利用された痕跡はなく、この一帯を聖域とする意識が長い間伝承されていたものと思われる。

2. 墓地の変遷について

吹上遺跡には二つの墓域があり、吹上遺跡の価値づけを考える上で、特に重要と考えられることから、中期後半以降の墓地変遷を中心とした特徴について説明する。なお、甕棺墓の変遷については、第 2 節で論じた甕棺の変遷での形態的特徴を基に時期比定を行う。ただし、口縁部を欠く甕棺も多く、胴部から底部にかけてのプロポーションなどの型式学的特徴だけでなく、切り合い関係などの二次的な要素も加味して大凡の位置づけを行う。

吹上遺跡出土成人用甕棺墓の時期は、中期 6 期が 6 次調査 2 号甕棺墓、中期 7 期には 2 次調査 1・2 号、6 次調査 1・4・5・6 号、9 次 B 地点 2・4 号甕棺墓、後期 1 期には 6 次 3 号、9 次 1・3 号甕棺墓、後期 4 期に 4 次 1 号甕棺墓が該当する。これら甕棺墓はプロポーションの類似度や近接埋葬の状況などから、時期は大きく隔てないものと考えられる。なお、2 次 3 号甕棺墓については甕棺が未掘であるため、隣接する 1・2 号甕棺墓と同時期の中期 7 期から後期 1 期と捉えておきたい。小児用甕棺墓は 10 次 144 号、9 次 B 地点 12 号甕棺墓が中期 6 期、9 次 B 地点 14・24・41 号、10 次 116 号甕棺墓が中期 7 期に該当する。木棺墓については、時期を比定できる遺物の出土は見られないが、6 次調査 1 号木棺墓の裏込土器の検討や、副葬銅剣の特徴、墓制が木棺から甕棺墓へと変化すると考えると、中期 5～6 期に該当するものと捉えたい。石棺墓については、9 次 B 地点 5 号甕棺石棺併用墓が後期 1 期と考えられることから、石棺墓への移行は後期 1 期以降と考えられる。そ

こで、石棺墓の時期を次期の後期 2 期から、甕棺墓が再び墓制に採用される後期 4 期以降と考えておきたい。

まずは 6 次調査区について説明するが、既に調査報告書で時期変遷等の詳細は述べられていることから、改めて整理するものとする。中期中頃～後半の 5～6 期頃に墓地造営は開始され、中期初頭から前半の遺構の見られない空白地を選定したように、7 基の成人墓（うち 3 号木棺墓については全容が不明なため除外する。）のうち、細型銅剣 1 点を右手の位置に副葬する 1 号木棺墓が作られる。この木棺墓の時期については、出土遺物などの状況から中期 5～6 期にかけてと想定され、この木棺墓築造より大きく時期を隔てない中期後半の 6 期には、1 号木棺墓と軸をややズラすものの、頭位方向を揃えて一定の距離をとった場所に 2 号甕棺墓が作られる。この甕棺墓には棺外に中細型銅戈 1 点が副葬され、棺上部には標石が設置される。その後、中期末の 7 期の古い段階で 1 号木棺墓・2 号甕棺墓と一定の距離を保ち、軸を揃えて相互に頭位を向かい合わせた 4・5 号甕棺墓が作られる。この 2 者は性別も男女に分かれ、墓域の構成を意識するように作られており、副葬遺物も 4 号が鉄剣 1 点、細型銅戈 1 点、ゴホウラ貝輪 15 点、ガラス管玉 533 点、硬玉勾玉 1 点と 5 号がイモガイ貝輪 17 点、硬玉勾玉 1 点といった、この墓域中最も優れた遺物の出土が見られることも注目される。これら 4 基の成人墓は一定の距離間という明らかに相互に意識した位置関係を保っていることから、墳墓上部の土饅頭の存在を想起させるとともに、これら 4 基の埋葬墓域が計画的に築造されていた可能性を示唆している。甕棺墓の堀方規模などが他墳墓と異なることや副葬遺物がこの 4 基に集中していることもこの可能性を高めている。しかも殆ど小児棺などが付随しないこともこの墓域の特殊性を物語っている。例えば、市内の大肥中村遺跡、五馬大坪遺跡などの木棺墓を主体とする列状の墳墓群には小児用甕棺墓などが付随しており、木棺墓や甕棺墓を主体とする大肥遺跡などでも多くの小児用甕棺墓が付随している。

このことから、6 次調査区の墓域は、これら 4 基の墳墓の築造を目的とする埋葬原理で形成されたと想定され、この意味から特定集団墓と位置付けられる。続いて、甕棺の型式学的には区分が難しいものの、前述の埋葬原理を維持せずに築造されることから中期末の 7 期の新しい段階に位置付けられる 1・6 号甕棺墓が 5 号甕棺墓に近接して作られる。それまでの墓地造営の規制が大幅に壊れ、さらに 5 号の土饅頭を意識したような位置関係を保つこれらの墳墓は 5 号甕棺の系列埋葬であろうか。いずれにしても、4・5 号甕棺墓の造営をもってこの特定集団墓域の形成が完了したことを物語っており、墓域の造営は相当に計画的に行われ、そのことを示すように後期 1 期には、改葬墓の 3 号甕棺墓が 2 号甕棺墓を切って作られ、墓域の築造が完了し、その後周辺には後期以降の遺構は全く見られなくなる。

このような 6 次調査区の墓域は北部九州の墳墓群のうち三雲南小路遺跡や須玖岡本遺跡のように所謂王墓との評価が与えられる中心的埋葬を欠くものの、多数の豪華な副葬遺物を有する墳墓群が一定の区画内で相互に距離を保って埋葬される立岩遺跡などに非常に類似した様相を呈しており、溝口氏（溝口 1999 ほか）が区画墓Ⅱと評価する墳墓に該当するものと考えて相違ないだろう。

このような 6 次調査区周辺の墓地造営に対して、1・2・4・9・10 次調査区周辺の台地南端の墓域は様相が異なっている。この一帯は中期 6 期以降墓域として造営されるようになるものの、墓域が連続するのではなく、時期毎に複数箇所に分かれる特徴を持っている。以下、時期毎に変遷を説明する。木棺墓が 6 次調査区の事例から中期 5～6 期に該当するものと想定すると、9 次 B 区 20・44 号、10 次調査区 107・108・110 号木棺墓が一定程度主軸を揃えて築造される。周囲には小児用甕棺墓が配置され、相互に一定の距離を保ち 10 m 範囲内に分散して営まれる。列状墓として造営される市内大肥中村遺跡や五馬大坪遺跡などの同時期の墳墓とは明らかに異なった様相を示している。続いて中期 7 期には空白地を埋めるように 9 次 B 区 2・4 号甕棺墓が営まれるが、この時期にはさらに、南西に 65 m 程離れた箇所に 2 次調査区 F 2 区 1～3 号墓が営まれ、2 箇所に分かれて墓域が営まれることになる。後期 1 期には、9 次 B 地点 1・3 号甕棺墓、5 号甕棺石棺併用墓、15 号石蓋土

墳墓が営まれ、一旦墓地造営は終了する。この墳墓域のうち、2次1・2号甕棺墓からは鉄刀・硬玉勾玉といった副葬遺物が出土しており、2次F2区1号甕棺墓、9次B地点2・3号甕棺墓には赤色顔料が塗布されていたことなどからも、その特殊性は高い。しかも北部九州で一般的な集塊状の列状墓ではないことなどから、それぞれの墳墓が一般成員の墳墓とは考え難く、墓域も一定範囲に固まることから、区画墓的要素があったものと考えられる。このことから、台地東端にある6次調査区のような特定集団墓とは別の階層の異なる特定集団墓と捉えておきたい。したがって、大きく2つ、南端墓域を2つに分けるならば、3つの墓域が同時併存していたことになり、これは複数墓域が付随する吹上集落の特殊性を高めている。区画墓は地域の拠点集落に付随している場合が多く、複数の埋葬系列が付随するとの指摘（溝口2008）などから、複数埋葬系列の存在は吹上遺跡が日田盆地内における拠点集落であることを物語り、氏の指摘に従うならば、墓を構成する成員は地域集団を構成する複数の集団から選択された人物たちと考えられ、複数墓域の構成主体の階層差が反映されていたのではなかろうか。筆者にはこの階層差と集団の関係をモデル化する力量と余力もないため、細かに論じることは差し控えるが、田中氏が、6次調査区4・5号甕棺墓などのように男女差し向かいの埋葬ペアの存在を、夫婦ではなく血縁関係を重視した「キョウダイの原理」に基づく人々と捉え、首長制社会の萌芽と指摘（田中2000）するように、6次調査区墳墓群が司祭者的権威を有して日田盆地の弥生社会を牽引する在地スーパーエリート層、それ以外の墳墓については複数集団内の選択されたエリート層の墓で、そのエリート層集団内部でさらに分節が行われていたものと考えておきたい。吹上遺跡の中期6期から後期1期の墳墓群は複雑に階層分化していく弥生社会の発展状況を反映していると考えられよう。

さて、南端の墳墓群は後期2～4期以降には位置をずらし、1次調査区5トレンチ、4次調査区と2箇所石棺墓7基、甕棺墓1基が集中して営まれ、前時期同様な埋葬原理が継続していた可能性がある。しかし、この時期には東端の特定集団墓の埋葬は終了しており、副葬品でも卓越する墳墓は見られないなど、前時期の埋葬構造は維持できておらず、吹上遺跡の拠点集落としての機能が終焉していた可能性が考えられる。この時期には市内各所で規模の大きな集落が見られ、吹上遺跡以外の集落に在地エリート層の墳墓は付随していた可能性も考えられるが、この時期に副葬遺物の卓越する墳墓は殆ど見られないことから、状況は判然としない。いずれにしても吹上遺跡の役割が変質していたものと捉えておきたいが、その役割は後期4期の条溝や環濠の出現など一定期間をおいて再び回復した可能性が考えられる。